

サーファーに関する実態調査
～ローカル、ビジター、種子島の移住サーファーの特性～

学籍番号：12022005

氏名：榎本祐作

担当教授：立木茂雄

サーファーに関する実態調査

～ローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーの特性～

学籍番号 1202005 榎本祐作

はじめに 研究動機と考察の対象

第1章 サーフィン、サーファーに関する先行研究および基本情報

第1節 日本におけるサーフィンの受容過程

第2節 ローカルサーファーとビジターサーファーについて

第3節 種子島の移住サーファーについて

第2章 ローカルサーファー、ビジターサーファー、種子島の移住サーファーの特性

第1節 仮説

第2節 調査

1. 調査方法

2. 調査対象

3. 調査場所

第3章 調査結果

第1節 地域別

第2節 カテゴリー別

第4章 考察

第1節 地域別

第2節 カテゴリー別

第5章 結論

おわりに 今後の課題

参考文献

巻末資料

はじめに 研究動機と考察の対象

筆者がサーフィンやサーファーに関する卒業論文を書こうと思った動機は、単純に自身が今年初めてサーフィンを経験したからである。サーフィンを趣味とする友人の影響でかねてからサーフィンには興味があり、念願叶って今年サーフィンに挑戦することが出来た。そしてサーフィンの大変さや難しさ、何より楽しさを身をもって体験したわけだが、もちろんそれだけでは卒業論文、ましてや社会科学の研究にはならない。サーフィンやサーファーを卒業論文のテーマにする大きなきっかけは、サーフィンに向かう車中の友人の言葉であった。友人は「サーファーはガラが悪い」「サーファーは頭が悪い」「サーファーは土方が多い」など、そんな言葉を言っていた。これはあくまで友人の個人的な意見であるが、ふと考えると確かに学生の私もサーファーに対してそんなイメージを少なからず持っているように感じた。私や友人だけでなく、一般的に見てもサーファーに対するイメージはいくらか固定観念があるようにも思う。「カッコいい」「異性にモテそう」「自由人」「ナンパな感じがする」「ガラが悪い」など様々なイメージが付きまとう。趣味がサーフィンの有名人も多くいる。あらゆるスポーツの中でここまで容易にイメージが浮かぶスポーツも珍しいように感じた。そして私のなかで疑問が浮かんだ。「本当にサーファーは頭が悪いのか」「本当にサーファーは土方が多いのか」と。

そしてもうひとつ気になった友人の言葉がある。「ローカルは見たらすぐにわかる」「俺らビジターは・・・」ローカル、ビジター、聞き慣れない言葉であったので友人に意味を聞いた。簡単に言うと、ローカルは地元のサーファーであり、ローカルは都市圏から車で何時間もかけてサーフィンスポットに行くサーファーだと言う。

また私のなかで疑問が浮かんだ。「ローカルとビジターでは何か違いがあるのだろうか」「ローカルやビジターには何か特性があるのだろうか」と。

つまり本論での考察の対象は「ローカルサーファー」と「ビジターサーファー」である。

そして近年種子島へのサーフィン移住が増加しているという事実から「種子島の移住サーファー」をもう一つ対象として加えることにする。そして本論では「ローカルサーファー」「ビジターサーファー」「種子島への移住サーファー」の三者を調査、比較し、三者の諸特徴や相違点を見つけることを目的とする。

本論はサーファーという特定のスポーツを楽しむ人々を対象とするものであり、サーフィンをしない人々にはいくらかわかりにくい部分があると思うので、次章ではサーファーやサーフィンに関する

先行研究、基本情報について言及することにする。

第1章 サーフィン、サーファーに関する先行研究および基本情報

第1節では、『日本におけるサーフィンの受容過程』（小長谷悠紀 2005）、第3節では、『種子島のサーファー移住：自然の発見と新たな人間的結合の創出』（内藤考至 2004）の論文の一部を抜粋、要約して記述する。

第1節 日本におけるサーフィンの受容過程

今日までの国内におけるサーフィンの受容過程は、3期に時期区分される。国内での受容過程が顕在化した1960年代初頭から、関連産業や活動手本が出揃う1970代半ばまでを「第1期：輪郭形成期」と呼ぶ。1961、2年頃、湘南の大磯・鵜沼・辻堂、外房の勝浦・鴨川、伊豆の白浜等で今日現存するものも含めて幾つかのサーフィン・クラブが創られ出し、コンテスト等も催し始めた。これらの先駆地については、米軍基地との近接性以外でも、古くからの海岸別荘地・行楽地で、地域の交流人口も多く海の遊びが浸透していたことが共通する。また、これとは別に、鶴岡市湯野浜付近では、太平洋航路の船員によりボートが輸入され、やはり早期にサーフィンが始まった。

同じ頃、ハワイロケの映画でサーフィンを披露した加山雄三が、私生活でも自作したボートを用いて茅ヶ崎の海岸で波の乗り、スポーツ紙に報じられた。輸入ボートは希少・高価だったのもあり、加山も含め湘南の初期の活動者は比較的裕福な家の者が多かったと聞かれる。

1964年夏、湘南海岸に局地的にサーファーは急増した。これには、当時の映画や音楽の影響が考えられるほか、当時の若者の海外志向を促進したとみられる人気の男性誌『平凡パンチ』が、夏に先立ち「サーフィンの夏だ！ウエストコーストのサーファーズ」と巻頭写真グラビアに5ページ割っていたことも関係している。また1965年おわりには日本サーフィン連盟が発足された（小長谷 2005）。

サーフィン関連業を見ると、1968年頃から丸井などの百貨店や総合スポーツ用品店などがサーフィン市場に乗り出している。

1971年には国内著作の単行本としては最初のサーフィン入門書が刊行され、1976年には国内初の専門誌『サーフィンワールド』が創刊された。

このように、今日にも共通するサーフィン関連商品の多く、および未経験者にもすぐそれと判る「活動の手本」は、60年代から1970年代半ばまでの間に出揃い、この時期にサーフィンの大衆化

舞台が構築された。

「第Ⅰ期：輪郭形成期」の段階を経て「第Ⅱ期：大衆化期」に移行する。この時期の前半は1970年代後半にあたり、「サーフィンファッションが今年の流行」「急速なサーフィン・ルックの流行」など、多くの雑誌や新聞に取り上げられている。サーフィンブームの起爆剤として知られる『POPEYE』は1976年に創刊された。サーフインは1979年夏には「ブーム爆発」「今をときめく」などと表現され、テレビCMではハワイのサーファーが波のパイプをくぐり、大学ではサーフィンサークルが華やかな存在として認知された。米国のサーフィンブームは西海岸の高校生に始まったが、日本では大学生に火がついたのである。

またサーファー風な装いや飲食店がもてはやされ、誇らしげにボートを積むワゴン車が目立った。1978年頃から六本木や新宿等の繁華街には、旧来のディスコと色を違えた「サーファー・ディスコ」が出現し、「サーファー」は「盛り場ファッション」としての印象も強めた。こうした店では、金曜日の夜に遊んだその足で湘南や千葉の海岸に繰り出すのが定式化し、また「湘南在住サーファー」と言えば、女性にもてるという意味通りの良い「ブランド」になった。

ところが、1980年頃のなると「サーフィンをすることが新しい」、あるいは「大勢がサーフィンをしに行く」といったことのニュース・バリューが失われ、マスコミの関連記事は事故、事件、批判の声などの記事に傾倒していく。「ゴーバック・サーファー運動」が生じた三重県浜島町をはじめ、適地海岸を有し、とりわけ「観光公害」とそれまで縁のなかった地区で「サーフィン公害」が問題化したこと、大麻所持逮捕者がサーファー仲間であった事件、サーファーの海難などである。マスメディアを介して社会の大多数が受け取り得るサーファーの印象は変わったと見なされる。

「第Ⅱ期：大衆化期」の後半は1980年代にあたる。1982年の一般雑誌でのサーフィン記事は、前年の半数以下であった。サーファー・ディスコに代表されたディスコ人口も1982年690万人でピークを向かえ、1983年からは減少に転じた。80年代半ばに向かって、日本のサーフィンと「それ風のもの」は、明らかにファッション性を喪失した。しかし、流行の後期追随者が追いついてくるのは、そのようにして先進性が薄れてしまった頃である。1981年7月、都内と湘南を結ぶ路線を持っていた小田急電鉄が、利用者の要望に応え、サーフ・ボードの車内持込をみとめた。この後、海岸が近い鶴沼海岸駅などに車を持たない高校生などの若年サーファーの姿が目立つようになった。また、1979年までの日本サーフィン連盟の加盟クラブの所在県は22都府県に過ぎないが、

1986年では42都道府県となっている。日本のサーフィンが全国的な伝播、大衆化を遂げたのは、ファッション性、話題性を減じればばらく経った、1980年代半ばとみなされる(小長谷 2005)。

なお、後期追随者の活動参加に先立つ前期多数採用者層の参加以降、同時進行するもうひとつの側面として、活動主体であるサーファーのなかでの分節化とその主張の声が高まったことを挙げておきたい。例えば、「こちらは地元である」といったローカリズムの話題が目立ってきたのは、1980年代に入ってからである。また、この頃から主に東南アジアなどの海外でサーフィンをする者も現れてきた。

ここまででサーフィンは全国伝播、大衆化を終える。そして1990年代以降は「第Ⅲ期：ポスト大衆化」にはいる。大学サークルのサーフィンは80年代に比べ衰退したが、これはファッション性の喪失に関係があるだろう。ただ、年齢がやや高めの世代で、90年代初頭からまたロングボードを用いる者が現れた。

自治体・地域社会では、主に「地元のサーファー」に対する再評価が進んだ。これは、家族でのサーフィンが珍しくなくなったこと、幼少時からサーフィンに親しんだ者に牽引されて若年層を中心に技能重視志向が増加したこと、また、地元サーファー等が中心で行う海岸清掃も活発化していることなどに関係があるだろう。地域社会の目に映るサーフィンは、かつての時に悪評をも伴った遊びから子供も行う健全なスポーツと目されるようになってきた。また、サーフィンの普及の当初は国内における在留米国人との異文化交流であったが、昨今は異文化交流の手段としてもサーフィンに注目が集まっている。

このように日本におけるサーフィンの受容過程は、国内での受容進行が顕在化しだした1960年代初頭から、関連産業や活動手本が出揃う1970年代半ばまでが「第Ⅰ期：輪郭形成期」としてあり、この段階を経て「第Ⅱ期：大衆化期」に移行した。1977年に若者雑誌に主導されたファッション性の創出を契機にブームが生じ、この後、1980年代を通じて、もはやファッション性が劣化したなかで、経済的あるいは地理的に活動環境が劣位な参加者も内包にいたる「大衆化」が達成された。「第Ⅲ期」は、「ポスト大衆化」という意味から1990年以降が位置づけられた(小長谷 2005)。

第2節 ローカルサーファーとビジターサーファーについて

残念ながらサーファーに関する先行研究は極めて少ない。またその研究は単なる実態調査に留まっているものが多い。その理由としてはその研究や調査が観光に関するものや過疎化問題に対するものであることが考えられる。社会科学の見地からサーフィンやサーファーを捉えた文献はほとんど見当たらなかった。した

がって「ローカル」と「ビジター」を明確に示す既存の定義が存在しない。そのため本論では一般的にサーファーの人々が思う「ローカル」と「ビジター」のイメージをその定義の根本にした。まず「ローカルサーファー」は文字通り「地元のサーファー」であり、特定のサーフ・スポットの周辺に住んでいる。つまり特定のサーフ・スポットまでの交通距離は非常に近いことになる。逆に「ビジターサーファー」は「訪問者のサーファー」である。ビジターサーファーは主に都市圏に在住し、サーフ・スポットまでの交通距離は遠い。このサーフ・スポットまでの所要時間の違いは「ローカル」と「ビジター」とを定義する大きな要素であり、多くのサーファーはこのサーフ・スポットまでの所要時間の違いで「ローカル」と「ビジター」とを区別していることが多いようだ。

しかし所要時間だけが「ローカル」と「ビジター」とを区別する要因なのだろうか。サーファー自身が自分が両者のどちらだと感じているかも重要になってくる。またそのサーフ・スポットで海岸清掃をしているのか、そのサーフ・スポットでのサーファー仲間の数、週何回そのサーフ・スポットに顔を出しているのか、など「ローカル」と「ビジター」を定義するほかの要因もあるかもしれない。やはり「ローカル」と「ビジター」を明確に定義することは難しい。そこで本論では、調査対象となるサーファーに対して配布するアンケートに「このサーフ・スポットで自分はローカルとビジターどちらだと思うか」「このサーフ・スポットでの海岸清掃の経験はあるか」や、サーファー仲間の数、週何回サーフィンに行くかなどの質問項目を設けることにした。

先行研究がなく、既存の「ローカル」と「ビジター」の明確な定義が存在しない。また両者を区別する可能性がある要因もいくらかあるため、本論ではサーファー自身の判断を優先することにする。つまりサーファー自身がこのサーフ・スポットで「ローカル」と思うか「ビジター」と思うかを定義にする。

第3節 種子島の移住サーファーについて

種子島は、西之表市、中種子町、南種子町の一市二町からなる。西之表市は鹿児島県の南方115キロメートルに位置する。種子島は、歴史的には鉄砲の伝来で、最近では南種子町の宇宙センターが有名である。産業としては第一次産業が中心で、サトウキビ、甘藷、たばこ、米などが主要作物である。周囲が海で囲まれており漁業も盛んで、イセエビなども獲れる。そしてその種子島に10年ほど前から若者のサーフィン移住が急速に増加している（内藤 2004）。その数は定かではないが300人くらいいるのではないかとと言われて